

inJapan Next

いんじゃぱんねくすと

地域のたからを全国へ、世界へ

絵
旅
日
本

2026 秋号
Vol.11



contents

特集 | イノベーションクラブ事例紹介
「しもつけの心マーチング委員会」

顧問並木将央氏連載コラム
「マーチングイノベーションのすゝめ」

あなたの街のマーチング委員会
「いよマーチング委員会」



一般社団法人
マーチング委員会





栃木県 宇都宮市
しもつけの心マーチング委員会
株式会社 井上総合印刷
代表取締役社長：井上 加容子

課題解決に挑戦し、新たな価値創造へ 地域の“困りごと”から始まるイノベーション



次世代型路面電車が走る宇都宮駅東口



センターからの眺め(左に平和観音が見える)



大谷グランド・センター常設展示室



エントランスの様子



落ち着いた雰囲気のレストラン



ローカルガストロノミーの世界をご堪能ください

地域の声に耳を傾けるという 企業風土

栃木県宇都宮市に本社を構える株式会社井上総合印刷は、1966年の創業以来、地域に根差した印刷会社である。しかし

近年、同社が注目を集める理由の一つに、全国的に知られた廃墟をリノベーションした「大谷グランド・センター」やカフェの運営などがある。これらは、一見すると印刷業とは結び付かないように見える取り組みだが、同社の井上加容子社長は、これらを単

なる新規事業とは捉えてはいない。あくまで「地域で必要とされることを形にしてきた結果です」と語っている。

同社が歩んできた道筋をたどると、いずれも地域の声を聞き、人と人をつなぎ、文化を育む場をつくってきたという共通した要素がある。その積み重ねが企業の役割を広げ、やがて印刷会社という枠を超えた新たな企業価値を生み出すことへつながっている。

井上総合印刷が取り組む地域貢献は、井上社長が始めたものではない。その原点は、創業者である井上光夫会長の時代にさかのぼる。

最初の取り組みは、地域の商店同士をつなぐ「商店会」の立ち上げだった。一般的な商店街のように一つの通りに店舗が並ぶ形ではなく、地元で商売を営む人たちがつながる新しいコミュニティづくりである。魚屋や肉屋、銀行、スーパーなど多様な業種が参加し、夏祭りや青空市、日帰り旅行などを開催しながら、地域住民との交流を深めていった。

まさにそれは、「身の丈に合った地域活動から始まったものでした」と井上社長は語る。その言葉どおり、決して大規模な取り組みではなかったが、この経験が「地域の課題を自分たちの課題として考える」という事業姿勢の基盤となっていった。

この活動は、自分史友の会の設立へと発展する。地域とのつながりが生まれたことから、その中に句集や俳句を趣味としている人との出会いを生み、「作品集を作りたい」という相談が寄せられるようになった。それがきっかけとなり自費出版事業が始まっていった。

地域の人へフォーカスした 雑誌づくり

個人の作品集づくりという経験が、後の今を生きる心の季刊誌『しもつけの心』へとつながっていく。『しもつけの心』の発刊では、広告収入に依存せず、地域で活躍する人々を紹介する記事を掲載し続ける冊子とした。内容は、「読まれたら終わり」の情報ではなく、何年経っても価値を持ち続ける地域の記録を目指した。掲載された人々との新たなつながりが生まれ、それが新たな仕事や地域ネットワークへと発展。地域貢献として始まった活動は、結果として企業の信頼を育てる資産にもなっていった。

井上社長は、「地域への貢献だから続けるのではなく、地域に必要なことを続けた結果が事業になった」と考えている。その姿勢は、本業である印刷事業にも一貫している。

同社では設備投資も、自社の都合ではなく市場の声を起点としてきた。「少数数のポスターを作りたい」という顧客の要望があれば、それに応えられる設備を導入する。必要とされるものを見極め、それに応えることで、要望に応じてくれる地域の企業として存在してきたといえる。

そして、印刷会社には、行政、企業、団体、住民など、地域のあらゆる情報が集まることが強みであると井上社長は語る。だからこそ、地域の困りごとを誰よりも早く知ることができ、それを事業として形にできる。その発想こそが、井上総合印刷の進化を支えている。

表現したい人と空洞化という 課題を掛け合わせる

地域に寄り添う活動を続ける中で、井上総合印刷の役割は少しずつ広がっていく。井上加容子社長が社長就任後に始まった新たな挑戦が、地域行政が発行する広報誌をデジタル化して閲覧できるようにする「TOCHIGI ebooks」の立ち上げである。

行政との仕事を数多く手掛ける中で感じていたのは、自治体ごとに発信される情報が十分に届いていないという課題だった。「行政同士をつなぐ役割ができればいい」。そんな思いから始まったこの事業は、地域

情報をデジタル化することで地域を超えて情報を発信することになり、新たなつながりを生み出すきっかけにもなっている。

また、その翌年には、宇都宮市中心部の空き店舗をリノベーションし、「カフェインブルー」をオープンしている。印刷会社がカフェを始めることは、一見すると全く別の事業への参入に見えるが、その背景にあったのは地域課題の解決だったという。

自費出版事業を通じて知り合った俳人や写真家、作家たちから、「作品づくりをする仲間が集まれる場所がほしい」という声が寄せられていた。一方で、行政との仕事を通じて見えてきたのは、中心市街地の空洞化という現実だった。井上社長は、この二つの課題を一つの場所で解決できないかと考えた。「作品づくりをする人が集える場所と、町の空洞化という課題。その二つを掛け合わせたら、新しい価値が生まれるのではないかと思います」。

キーワードは“地域”と“再生”

「カフェインブルー」は、約30年間使われていなかった建物を再生したもの。「リノベーションや再生ばかりしています。私は再生の女です」とも語る井上社長。このカフェは、レンタルスペースも備えた交流拠点へと生まれ変わり、グランドピアノも置かれている。そこでは音楽会や展示会、交流イベントなどが開かれる文化発信の場に変身した。宇都宮がジャズの街として培ってきた文化とも響き合い、地域の魅力を再発見する場所として、多くの人が集うようになった。

こうした活動は、印刷業から離れているように見える。しかし井上社長の中では、「地域の困りごとを解決する」という一本の線につながっている。加えて、地域へのまなざしは、マーチング委員会との活動にも色濃く表れている。

井上総合印刷が発行する今を生きる心の季刊誌『しもつけの心』では、「まちなみ今昔ものがたり」という人気企画を連載。古い写真をもとに当時の風景をイラストとして描き起こし、現在の景色のイラストと並べて紹介する企画だ。その土地に暮らしてきた人々の記憶や歴史を掘り起こし、地域の物語として伝えていく取り組みとなっている。

地域のイラストが物語を 掘り起こす

この企画は多くの時間と手間がかかる。古い写真を探し出すことが何よりも苦労する点だという。その写真をもとに、同じ場所を撮影し、その地域をよく知る人への取材を通して、イラストと一緒に一つの物語として紹介していく。「その場所だけにしかないストーリーが浮かび上がってくるのです。印刷会社だからこそできるものづくりだと思います」という。

作成したイラストは表紙にも採用し、多くの読者から好評を得ている。将来的には「まちなみ今昔ものがたり」だけで一冊の本をつくりたいという構想も抱いている。これは単なる誌面づくりではなく、地域文化の



2006年4月の創刊から今年で創刊20周年を迎えた、今を生きる心の季刊誌『しもつけの心』

アーカイブでもある。地域の記憶を未来へ受け継ぐという価値になる。

こうした活動を積み重ねることで、人をつなぎ、文化を育み、地域の魅力を編集する存在へと進化することを続けている。中でも、今年オープンした宇都宮市・大谷地区に進めた「大谷グランド・センター」の再生は、これまでの活動の集大成ともいえる取り組みとなっている。

それまで全国的にも知られる廃墟だった大谷グランド・センターを、地域の未来をつくる文化創造拠点へと生まれ変わらせた。単なる施設のリノベーションではなく、20年以上にわたる地域活動の延長線上でたどり着いたプロジェクトとなっている。



大谷グランド・センター ギャラリー

地域との共創が、企業の未来をつくる

大谷グランド・センターのグランドオープン後、この場所は多様な人が集い、新たな交流が生まれる拠点となり始めている。アート作品の展示や音楽イベント、宇都宮市主催の婚活イベントや個人によるサプライズプロポーズなど、その活用方法は多彩だ。

グランドオープンでは地域住民を招待し、こだわりの屋上からの景色も披露した。参加

した人からは、「何十年ぶりに建物へ入った」「自分たちの町がこんな景色だったとは知らなかった」といった声も寄せられたことは、井上社長にとって「嬉しかった」シーンの一つだったという。

こうした数々の地域に根付いた取り組みは、会社そのものにも新たな価値をもたらしている。イベントを企画・運営する立場になることで、会場装飾やサイン、パンフレット、販促物など、現場で本当に必要とされる印刷物が理解できるようになった。イベント主催者と同じ目線でつくり上げる経験は、従来の受注型では得られなかった視点を会社にもたらしした。

地域に飛び込み、自ら実践する。その経験が、印刷会社としての提案力を高める好循環を生み出している。企業文化にも変化が表れていると感じている。社内で実施したブランディング研修では、社員たちから

「人と人をつなぐイベントを企画したい」「耕作放棄地を活用したい」「地域を巡る企画を考えたい」など、印刷の枠にとらわれない多様なアイデアが次々と生まれた。そこには、「地域のために何ができるか」を自ら考える風土が根付き始めていることがうかがえる。

現在、AIの進化やペーパーレス化など、印刷業界を取り巻く環境は大きく変化している。しかし井上社長は、情報が簡単に手に入る時代だからこそ、人にしか生み出せない発想や、地域でしか育まれない文化、リアルな場での出会いが、ますます価値を持つと考えている。

地域の多様な情報が集まるという印刷会社の強みを生かすことで、人と人をつなぎ、新たな価値として社会へ還元することができる。その根底には、地域で必要とされることに向き合い、一つひとつ形にすることで、会社の新たな強みとなり、それが社員の誇りにもなり、企業ブランドへと育ちつつある。地域の課題やニーズから、そこに眠る価値を掘り起こし、地域貢献へ。

地方創生や地域の支援はどこから始めたらいいのかという問いがある。井上社長は、その質問に対して、「何でもできると思う」と答える。町の印刷屋さんなら、お店をコミュニティの場にして、近所の方がお茶を飲んで隣でオンデマンド機が動いていてもいい。弊社事務所の門戸を開けておくと、本当に「コピーを1枚取ってほしいと訪ねてくれる方もいらっしゃいます。コピーのような小さな活動から地域とつながっていくきっかけは沢山あるのではないのでしょうか」と語っている。■



井上総合印刷平出工場

My Innovation

Q. 井上加容子社長にとって「Innovation」とは？

日々の小さな営みの積み重ね。そして、変えてはいけないものを守りながら、その意味を未来へと繋いでアップデートしてゆく事がイノベーションだと考えています。思い返せば、創業から今日まで自然の流れに任せ、興してきた一つひとつの小さな事業、その全てがイノベーションでした。私は今日もまた、未来のイノベーションに出逢うために、一歩ずつ確実に行動してゆこうと思います。

委員会DATA

しもつけの心マーチング委員会

所在地 栃木県宇都宮市岩曾町1355番地
代表 井上 加容子
運営企業 株式会社 井上総合印刷
HP <http://www.inoue-gp.jp/index.html>
連絡先 Tel.028-661-4723(代)

井上総合印刷
WEB TOP



マーチング イノベーションの すゝめ

顧問並木将央氏特別連載コラム



並木 将央

株式会社ロードフロンティア 代表取締役
一般社団法人 マーチング委員会 顧問

1975年生まれ。2011年にITやビジネスモデルをコンサルティングする株式会社ロードフロンティアを設立。成熟社会経営コンサルタントとして、業種、業態を問わない戦略構築が幅広い顧客の支持を得ている。2014The Japan Times「次世代のアジアの経営者100人 2014」に選出。

第2回テーマ

「ローカルゼブラ企業にAIは必須？」

「余力なくして共助なし」

～本業の外に生まれる新たな役割～

ローカルゼブラ企業とは、地域のハブとして自治体・住民・他企業をつなぐ触媒的存在です。しかしこの役割を担うには、本業以外の関わりが必然的に増えていきます。地域の課題を掘り起こし、コミュニティを形成し、共助の仕組みを構築する——これらはすべて、通常の営業活動の枠を超えた「時間」と「人的リソース」を必要とします。つまり、ローカルゼブラ企業になるためには、自社の業務効率化によって余力を生み出すことが大前提となるのです。人手が逼迫した状態のままでは、地域のハブとしての役割を担う余裕は生まれません。ここにこそ、AI活用の必然性が浮かび上がります。定型業務や情報処理をAIに任せることで、人にしかできない「共助」や「コミュニケーション」に人的資源を再配分できる。これが第一の論点です。

「職人技はいらない、商売になればいい」

～AIが生む新規事業の民主化～

AIのもう一つの価値は、他者の専門性を自社のスキルとして取り込み、新規事業化できる点にあります。属人的な技術、たとえばミシュランに載るような寿司職人の技を一朝一夕に習得することは不可能です。しかし、寿司ロボットが握る寿司であれば、十分に商売として成立します。つまり、AIは「完璧な専門性」を再現するのではなく、「実用に足る水準」を誰でも扱えるようにする民主化ツールなのです。地域のシーズやニーズを掘り起こしても、それを事業化するスキルが自社になければ絵に描いた餅で終わります。AIを活用すれば、専門知識や技術がなくとも新規事業への参入障壁を大きく下げることができる。これは、ローカルゼブラ企業が多角的に地域課題へアプローチする上で、極めて強力な武器となります。

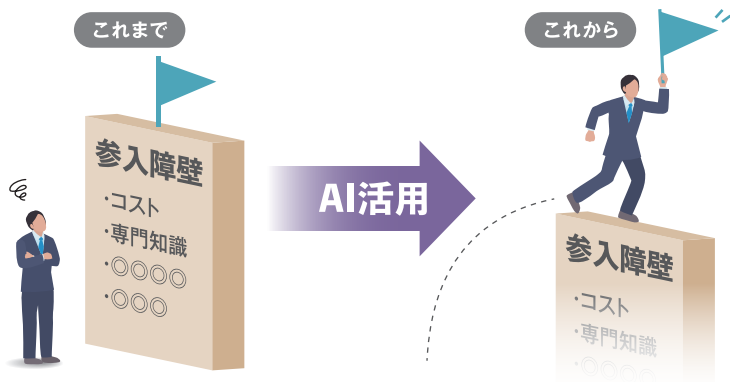
「AIの旗を掲げる者が、地域の中心になる」～親ゼブラへの道～

AIは今や業種を問わず、あらゆる企業にとっての共通関心事です。裏を返せば、地域でAI分野の第一人者になることは、あらゆる企業との接点を自然に生み出すことを意味します。マーチングが掲げる「地域のハブ」としての機能は、まさにこの「みんなが知りたいが、誰も詳しくない」領域を押さえることで強化されます。AIに関する知見・導入支援・活用事例を蓄積した企業は、地域内の多くのローカルゼブラ企業群の中でも中心的存在——いわば「親ゼブラ」としてのポジションを築くことができるのです。地域課題解決のための共助コミュニティにおいて、技術的な旗振り役を担うことは、単なる一企業の枠を超えた影響力を持つことにつながります。

まとめ：

AIは「必須」ではなく「触媒」である

ローカルゼブラ企業を目指す上で、AIそのものが目的ではありません。しかし、余力を生み出し、新規事業の参入障壁を下げ、地域における中心的存在への道を開く「触媒」として、AIはほぼ必須的存在になりつつあります。次回は、実際にAIをどう自社や新規事業、地域コミュニティに実装していくか、具体的な手順に迫ります。■



「マーチング
イノベーション読本」
発行のお知らせ



マーチングイノベーション読本を発行いたしました。本読本は会員企業がローカルゼブラ企業に変貌するためのガイドブックとなります！

◎ 詳細はマーチング委員会公式HPにてご確認ください。

Check!



いよマーチング委員会

いよマーチング委員会は、「イラストで笑顔あふれる愛媛に」を合言葉に、地域の魅力をイラストで発信し、地域活性化に取り組む団体です。観光地だけでなく、何気ない日常の風景や思い出の場所など、愛媛ならではの景色を「愛媛ひとまち百景」として紹介しています。また、展示会の開催や絵はがきなどの企画・販売を通じて、地域とのつながりを深め、「愛媛県っていいね!」と思ってもらえるまちづくりを目指しています。

委員会DATA

いよマーチング委員会

所在地 愛媛県松山市問屋町6番21号
代表者 代表取締役社長 佐川 正純
運営企業 佐川印刷株式会社
HP <https://www.sakawa.co.jp/>
連絡先 Tel. 089-925-7471(代)



「ワクリエ新居浜」のイベントで展示
出展した際の様子(2024年10月)



作品タイトル:飛鳥乃湯泉

飛鳥乃湯泉は平成29年に誕生した、飛鳥時代の建築様式を取り入れた湯屋です。「太古の道後」をテーマに、道後温泉にまつわる伝説を愛媛の伝統工芸と最先端のアートのコラボ作品で演出しています。露天風呂や特別浴室も設えており、湯帳を着ての入浴体験も可能です。温泉に癒されながら、感性を刺激する空間が楽しめます。

活動報告

めでタイ!えひめ・鯛みくじ、 ご当地ガチャで地域応援!

愛媛の特産品である鯛をモチーフにした「めでタイ、鯛にあやかりタイ!えひめ・鯛みくじ」ガチャを商品化。ガチャを回すと、鯛やあやかり鯛をデザインしたアクリルスタンドとおみくじが手に入り、愛媛の魚文化や観光の魅力に触れながら、魚にちなんだお告げが楽しめます。地域資源を活用したご当地ガチャとして、訪れる人の心をガッチリキャッチ、地域活性化を目指します。



鯛とあやかり鯛をかわいいイラストにした「えひめ・鯛みくじ」のアクリルスタンド



道後商店街の「道後湯之町 十五万石 MASARU」様にてガチャガチャを設置している様子



《鯛みくじの一例です。魚の紹介と運勢が載っています》

◎自分たちにできることを考え、地域資源を活かした発想が
地域の魅力発信と活性化につながることを実感!

公式WEB



公式FB



MORE INFO

いよマーチング委員会の
最新情報はここからチェック!

message

愛媛の魅力を楽しく発信し、笑顔と愛着あふれるまちづくりへ。
いよマーチング委員会は、ふるさとの魅力を未来へ届けます!



1

イノベーション読本&AIセミナー in 静岡 + 公開セミナー

『成熟社会の地域イノベーション』 開催レポート

開催日程／ 2026年6月23日(火)・24日(水)

会 場／ 1日目 イノベーション読本&AIセミナー
2日目 成熟社会の地域イノベーション

1日目は「地域イノベーション」に対しての考え方から、AIエージェントについてレクチャーなど、グループ討議の時間帯もあり、参加者である日本レーベル印刷株式会社の社員の皆さまが、自社に合ったAI活用について深く考え、それぞれの立場から意見交換ができる有意義な時間でした。

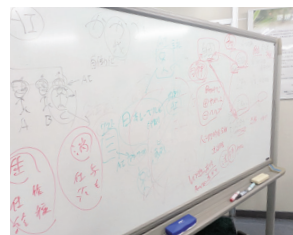
2日目の公開セミナーは3部構成で行われました。並木氏による基調講演では日本の国際収支の現状から地域が生き残るためどんなイノベーションが必要かを教えていただきました。事例報告として西村氏の富士山



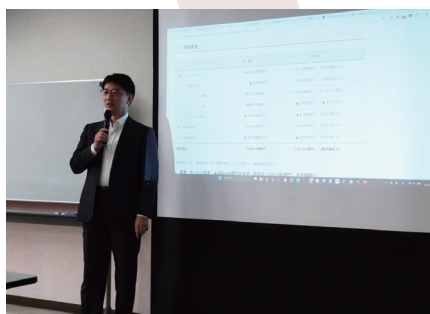
グループ討議中の参加者



冒頭の挨拶を行う岩井代表



「キモ」で一杯になるホワイトボード



基調講演をする並木氏



事例発表をする西村氏



座談会での西村氏と並木氏



満員のセミナー会場

が見える場所で、世界で認められる高品質オリーブオイルを作りたいと11年前に「クレアファーム」をつくり新たな「農林水産業ビジネスモデル」になるまでをお話いただきました。最後の並木先生と西村先生による座談会まであっという間に3時間が過ぎました。



地域イノベーションワークショップ
in 駿河の国マーチング委員会
(マーチング委員会公式HP掲載)

主催: 駿河の国マーチング委員会
協力: 一般社団法人マーチング委員会

マーチング委員会会員だから受けられる並木将央氏のサポート

イノベーション活動のスタートに!!

全国の会員企業に向けた「イノベーション読本&AIセミナー」や地域コミュニティ向けの「成熟社会の地域イノベーション」を各地で巡回開催しています。会員が地域イノベーションを起こし、ローカルゼブラ企業を目指すための実践的な学びや事例共有が行われています。

「ぜひ、うちの地元でも開催してみたい!」など、ご相談・お問い合わせは マーチング委員会事務局まで m-jimukyoku@tonegawa.co.jp



講師: 並木 将央 氏

inJapan Next

いんじゃぱんねくすと

地域のたからを全国へ、世界へ

絵
旅
日
本

2026 秋号
Vol.11



今号の街／愛媛県松山市

作品タイトル：『旧松山駅舎』

県内外各地から多くの人を訪れる、松山の陸の玄関口です。文化の風薫る松山のイメージに合うレトロな駅舎で親しまれてきましたが、現在は新駅舎が整備され、このイラストの旧駅舎の姿はもう残っていません。電車やバスなど交通の拠点として賑わうこの場所は、これからさらに駅周辺も含めて、より便利で魅力あるエリアへと発展していくことが期待されています。

「えひめ・鯛みくじ」
真鯛のアクリルスタンド



地域の魅力を発信する
『いよマーチング委員会』
佐川印刷株式会社
<https://www.sakawa.co.jp/>

contents

特集 | イノベーションクラブ事例紹介「しもつけの心マーチング委員会」

顧問並木将央氏連載コラム「マーチングイノベーションのすゝめ」

あなたの街のマーチング委員会「いよマーチング委員会」

マーチング委員会 Topics & Information

